

すでに起こってしまった「革命」への眼差し

——ブランショ「文学と死への権利」における隠喩の解釈をめぐる——

東京大学 中田峻太郎

はじめに

本稿の目的は、モーリス・ブランショ（1907-2003）の「文学と死への権利」（1947-1948）における「革命（恐怖政治）」の隠喩を解釈すること、それによって、1930年代から40年代という活動の初期段階におけるブランショの「革命」の思考の展開を描くとともに、彼の文学言語の探求が始まる契機のひとつを明らかにすることである。

「文学と死への権利」は、ブランショの作品の中で最も多く参照されるもののひとつである。それは、戦後間もない時期に発表されたこのテキストが、「ブランショの後のあらゆる文学論に通底する言語観を示した決定的な論文」（1）であるからだ。しかしこのテキストにおいて読解の対象となるのは多くの場合、命名行為をめぐる論文後半の記述であった。さらに論文前半に位置する革命の隠喩（革命とのアナロジーによる文学の定義）の箇所は、これまでブランショの文学論に関する文脈では軽視されてきた。そして、この箇所はこれまで「政治的読解」にさらされてきた。

周知のようにブランショは1930年代、非順応主義的な右派の論客として活動しており、その言説は「革命」さらには「テロリズム」を主張するほど激烈なものであった（2）。そのようなブランショの政治的過去を前提に、ブランショの文学的著作を彼の政治的過去に還元しようとする「政治的読解」の実践者のひとりにフィリップ・メナールがいる。「起こることのなかった革命、たとえば「1934年2月」がその挫折を示しているような革命の理念を、ブランショが再興しようとするのを妨げるものなど何もない。作品の空間において始まるのは、[...] 30年代に政治的には実現しなかったものの劇的な反復である」（3）。つまりメナールにおいて「文学と死への権利」における革命の隠喩は、ブランショの政治的過去の回帰として処理されてしまう。

クリストフ・ビダン「文学と死への権利」における革命の一節に重要性を認めていない。それは次の限りにおいては正当なことであるように思われる。すなわち、革命という隠喩の中に「彼の政治的過去の厳密な再現を読もうとした」、（メナールをはじめとする政治的読解の実践者も含まれるであろう）「ブランショの誹謗者たち」（4）に対して否を突きつける限りにおいてである。ビダンは、この隠喩が含まれる一節について次のように論じる。「その一節を、その本来の位置へと差し戻さなければならない。すなわち、それは

「文学と死への権利」の4ページにも満たない部分であり、たしかに調子は激しく決定的な部分であるが、結論を述べている部分では決してないのである(5)。ビダンの指摘は正しい。「文学と死への権利」は評論集『火の部分』(1949)の巻末論文であり、その分量は約40ページに及ぶが、当該の一節は中盤の4ページほどを占めているにすぎない。しかし、これがその一節の「本来の位置」であると果たして言い切れるのだろうか。というのも、評論集に収録された「文学と死への権利」という論文は、雑誌に掲載された二つの論文(「精神の動物界」(1947年11月)と「文学と死への権利」(1948年1月))を繋げる形で構成されており、革命の隠喩の一節は前者の論文の最終部分で現れるからである(6)。もちろん、評論集に所収されている版には雑誌版に対する優越がある。しかし雑誌版の存在を考慮すると、革命の隠喩がこれまでの研究とは異なる仕方で現れ始めるのも事実である(7)。つまり、ブランショの文学論の文脈では軽視され、もっぱら「政治的読解」にさらされてきたこの隠喩が、単なる挿話、論文の枝葉末節ではなく、初期ブランショの文学的探求の展開における重要な契機のひとつとして現れるのである。

本稿では、まず「文学と死への権利」の前半部分、つまり論文「精神の動物界」において革命の隠喩が導き出される理路を確認し、次に30年代のブランショの革命観を分析する。その上でこの隠喩がもつ文学的含意を解釈していく。

1. 文学という「問題＝問い (question)」

まず、「文学と死への権利」において革命の隠喩が占めている位置を見ていく。つまりこの文学論において、この隠喩はそもそもどのような論理によって、またそれ自体がどのようなものとして要請されているのかを読み解いていく。

「文学と死への権利」には小さな謎が隠されている。しかしそれはこれまで見過ごされてきた。その謎が含まれるのは、「革命」の隠喩の直後、つまり論文「精神の動物界」においては文章の最終的な結論にあたる箇所である。

文学は革命のうちに自らの姿を認め、そこで文学は根拠づけられる。そして文学を「恐怖政治」と呼んだのは、文学がまさに「生が死を担い、死そのもののうちに保持される」この歴史的瞬間を理想とし、言葉の可能性と真理を死から得ようとするからである。これこそが、文学において実現されることを求め、文学の存在そのものであるところの「問題＝問い (question)」なのだ。(PF, p. 311, 強調引用者。)

引用の前半部分、つまり革命（恐怖政治）による文学の定義は、それまで約4ページにわたり展開されてきた隠喩のまとめである。ここで注目したいのは最後の一文である（雑誌版では最後の一文は改行され、それまでの文とは独立した段落を成している）。なぜ「question」には引用符「»」が付いているのか。実際、革命の記述の後に突如として現れるこの引用符付きの「問題＝問い」は奇妙である。たしかにブランショはここで何らかの「問題＝問い」、文学の存在そのものであるところの「問題＝問い」に対する「答え」あるいは「結論」を出しているように思われる（ただし、「問題＝問い」に答えるという意味ではなく、「問題＝問い」自体を明確に定めるという意味であるが）。しかし、そもそもその「問題＝問い」とは何か。それはどこで提起されていたのか。

評論集に掲載された最終的な形で「文学と死への権利」を読む限り、この謎を解くのは難しい。評論集版において先の引用部分は段落の途中に位置し、すぐに「文学は言語と結びついている」という一文（つまり雑誌版の「文学と死への権利」の冒頭の一文）が続くため、「結論」としての性質が見えにくい。そして、そもそも「結論」以前に、それに対応する「問題＝問い」自体が明確ではない。実際、評論集版ではそれまでの箇所でも引用符付きの「問題＝問い（question）」は一度も現れないのだ（8）。

雑誌版と評論集版の間には異同はほとんどないが、ここではその数少ない異同が謎を解く鍵となる。というのも、論文の冒頭2段落目の一文（PF, p. 293）に現れる question に、雑誌版においては引用符が付いているからだ。つまりブランショが上記で「結論」を与えていた「問題＝問い」は、実は論文の冒頭において提起されていたのである。冒頭の問題提起に対して最終の結論部で答えるというこの文章構造は、革命の隠喩までの「文学と死への権利」前半部分（つまり論文「精神の動物界」）がひとつの完結したテキストであることの証左でもあるだろう。では冒頭に提示された「問題＝問い」はいかなるものか。ここでは雑誌版を引用する。

文学は、文学が「問題＝問い」になる瞬間に始まることを認めよう。[...]
ひとたびページが書かれるや、そのページには、作家が書き続ける限り
彼に尋問することをやめない問題＝問いが、おそらく作家の知らないう
ちに存在しているのだ。そして今や作品の中心に、[...] 書きそして読む
人間の背後で、文学となった言語から言語に向けられた同じ尋問が、静
かに横たわっているのである。（RA, p. 387, 強調引用者。）

整理しよう。まず「問題＝問い」は、ページが書かれた瞬間に、それを書い

た作家にも気づかれぬままに存在し始める。さらにその「問題＝問い」は、作品つまり「文学となった言語」から発せられ、言語とそれを用いる作家に向けられている。ここで強調されるべきなのは、文学の存在そのものであるところの「問題＝問い」が始まるのは、すでに書かれたページからであるということだ。

ブランショはさらにこの「問題＝問い」を限定していく。それは「文学の価値や権利」に関わるものではなく、「芸術に対する批判、芸術の力や目的に対する批判」でもない（PF, p. 294.）。ブランショの眼差しは作品の内部に隠されたある「作用（travail）」に向かっている。

文学は自らの廃墟の上に築かれる、という逆説は我々にとってありふれたものだ。しかしまた次のことを探求しなければならないだろう。つまり、そのように芸術を問題にするとときに前提となっているのは〔…〕ある種の力から、作品の秘密のうちにある白日のもとに現れるのを嫌う作用（travail）への移行や置き換えではないのかということである〔…〕。

（PF, p. 294, 強調引用者）

「文学は自らの廃墟の上に築かれる」という言明は、文学の批判においてもその擁護においても常套句である。ブランショが注意を促すのは、そのようなありふれた文学観において暗黙裡に、あるいは人に気づかれぬままに前提とされているものである。つまりブランショが提示する「問題＝問い」は作品のうちに隠されたある「作用」をめぐるものである。そしてこの「作用」は最終的に「革命」の隠喩によって語られることになるだろう。

ただ、論文冒頭においてもブランショはこの「作用」の実質を示そうとしている。その際の参照先は2つある。それは第一にシュールレアリスムであり、それが暴いた文学の「無（nullité）」である（9）。ブランショは自動書記（écriture automatique）のような実践を、文学一般のモデルにまで拡張しようとする。つまり文学の「無」、その「空虚な内部（dedans vide）」からあらゆる作品は生まれるという。

文学はある瞬間においては無（rien）でありながら、即座に＝直接的に（immédiatement）すべて（tout）と化し、すべてが存在し始める。これは大いなる驚異だ。（PF, p. 294.）

このように「無（rien）」と「すべて（tout）」が無媒介に通じ合う「反転」の運動こそが作品に隠された「作用」であり、ブランショは文学をそのような「作用」をはらんだものとして認識している。さらにこの認識は第二の参照

先であるカフカの経験にも通じている。

カフカが何気なく (*au hasard*) 「彼は窓から眺めていた」という文を書いたとき、この文はすでに完璧であるという一種の靈感の中に自分はいた、と彼は語っている。(PF, p. 297, 強調引用者。)

このカフカの経験は文学という営みにおける最小でありかつ純粋な出来事を示しているだろう。ブランショはこれを以下のように解釈する。

書かれるものは、上手く書かれたものでも下手に書かれたものでもなく、重要でも空疎でもなく、記憶すべきものでも忘却にふさわしいものでもない。それは完璧な運動である。その運動によって、内部では何のもでもなかったものが、必然的に真である何ものかとして、また必然的に忠実な翻訳として、厳然たる外部の現実に到来したのである。というのも、翻訳されるものは、翻訳によってのみ、そして翻訳の中にのみ存在するからである。(PF, p.297, 強調引用者。)

「彼は窓から眺めていた」という文が完璧なのは、この文を書くという行為が「完璧な運動」であるからだ。その運動は、必然的に真である翻訳、原作のない翻訳、つまり「無」からその「すべて」が生じる翻訳である。

上述の「問題＝問い」は、このような文学の「作用」をめぐって提起されている。もちろんこれはブランショの探求の端緒であり、帰結ではない。ただしこのような「問題＝問い」の設定は結論部である革命の隠喩に至っても変わることはない。「無」から「すべて」への運動としての文学は、以下のように革命とのアナロジーに置かれる。

革命的行動はあらゆる点で文学が具現する行動に類似している。つまり、無からすべてへの移行 (*passage du rien à tout*)、出来事としての絶対の肯定、絶対としての個々の出来事の肯定である。(PF, p. 309.)

2. 不可能性への固執—1930年代における革命論の中心

かつてブランショが革命を中心とする急進的な政治言説を生産していたことを知る者にとって、ブランショが文学論において「革命」という言葉を用いたとき、そこに彼の政治的過去の残響を聞くように仕向ける誘惑は確かに避けがたいものだ。しかし、はたして 30年代における政治的革命の思想と「文学と死への権利」における革命の隠喩の間にはどれほどの親和性が認められるのか。両者の同一性と差異を厳密に検討しなければ、その誘惑に基づく読解は単なる類推の域を出ないだろう。この章では、30年代におけるブラ

ンショの革命の思想を確認し、次章での分析の準備作業を行う。

30年代におけるブランショの思想的マニフェストのひとつに「革命に抗するマルクス主義」(1933)がある。表題からも分かるように、このテキストにおいてブランショは、マルクス主義は革命の理想を裏切っていると批判するのだが、それと同時に批判を通して自身の革命論を構築している。彼のマルクス主義批判についてここで詳述することはできないが、安原伸一朗の表現を借りれば、その批判の核心には、「マルクス主義はすでに民主主義という現行の政治システムの中に組み込まれており、その理論にはもはや体制を転覆させるに足りるほどの革命的影響力はない」(10)という認識がある。それゆえ、ブランショが共産主義革命を「物質主義＝唯物論 (*matérialisme*) が産み出す偽りの革命」(CP, p. 88.)として批判するのは、「その革命が、それが反対しなければならないはずのあらゆるものの運動から厳密に導き出される」からであり、あるいは「資本主義経済を転覆するはずのその最終行為 [= 革命] が、ほとんど機械的な必然性によって依存しているのが、その資本主義経済の実現を可能にする諸行為を長きにわたって受け入れ、承認し続けることである」からだ (CP, p. 108.)。ブランショにとって、マルクス主義革命の歴史的必然性は革命の理想に対する背理そのものであった。

レスリー・ヒルが言うように「ブランショにとって革命の目的の全ては、政治と歴史に暴力的な断絶をもたらすことであった」(11)。断絶の力に革命の本質を見るブランショは、マルクス主義革命の必然性に対立するようにして、革命の不可能性を選び取る。ブランショの結論は次のようになる。「革命が成功しない限り、革命は不可能である。(Tant qu'une révolution n'a pas réussi, elle est impossible.)」この奇妙な結論を、ブランショはさらに突き詰める。

困惑させられる結論だ。ただ、最も驚かされるのは、この結論が実のところあらゆる革命運動の正確な定義を含んでいるということだ。というのも革命は、ばかげていて信じがたい余分な存在であるものを増大させるのだから。つまり、革命が、依然として無傷であるように思われる社会を転覆させるはずのものである限り、革命はわけのわからないもの (*incompréhensible*) であり続ける。革命は、世界を廃絶するという事実においてその全体を現出させる。ということは、この世界が存在し続けている限り、革命を思い描くのは困難であり、革命を現実として見なすことはほとんど不可能である。[...] 革命の実現を信じるためには、革命の実在を半ば信じなければならないのだ。(Pour croire à la

révolution, il faut presque croire en elle.) (CP, pp. 106-107.)

現行の世界における歴史を完全に断絶する革命は、この世界の秩序と論理から導かれてはならない。そのような革命を求めるブランショの議論は、以上のように限りなく同語反復に近いものになっている。

しかしまた、革命の成功だけが埋め合わせる、革命のこの不可能性は、革命が決して必然ではないということに由来する。[...] 革命は、外部からの介入、いくつかの出来事の無償の創造、そして歴史的慣習の突然の殲滅を必要とする。[...] 革命はその偶然の起源から、最終的には瞠目すべき極限的な実在性を引き出し、革命を否定する者たちに対して、革命は不可能から必然への突然の移行 (le passage brusque de l'impossible au nécessaire) であるということを示すのである。(CP, pp. 107-108.)

ブランショにとって、歴史の断絶としての革命は不可能なもの、つまり断絶されるべき現行の世界では思い描くことすら不可能なものとして要請される。革命が革命たり得るのは、それが不可能である限りである。つまり革命の不可能性は、ここでは革命の「可能性の条件」となっている。ところでブランショは、革命を「不可能から必然への突然の移行」として描いているが、明らかに彼はこの「必然」については議論を避けようとしている。というのも、「革命は必然である」と言ってしまうと、それはたちどころにマルクス主義革命の論理に回収されてしまうからであり、ブランショはあくまでも「不可能」の側に留まらなければならなかったからだ。実際、結果的に革命が「必然」になることについての、つまり革命が成功した後の新たな歴史的地平において、革命が「必然」と見なされるほどの実在性を獲得することについての議論を、ブランショは展開しようとしなない。

ブランショはその後、革命を遂行する主体的行為として「拒絶 (refus)」という概念を練り上げていくが、ここでそれを論じることはできない。しかし 30 年代におけるブランショの革命論の中心は以上の分析で明らかになったはずだ。つまり、ブランショは徹頭徹尾、革命の不可能性に固執するのである (12)。

3. すでに起こってしまった「革命」への眼差し

1 章の最後の引用文において、文学は「無からすべてへの移行 (passage du rien à tout)」として定義されていた。そして 2 章においてこれに類似する表現が出てきた。つまり革命の定式「不可能から必然への突然の移行 (le

passage brusque de l' impossible au nécessaire)」である。この類似を指摘したのはローラン・ジェニーである。「革命を構成する「不可能から必然への移行」は、文学が具現する「無からすべてへの移行」のなかにそのモデルを有している。」(13) たしかに両者は表面的には類似しているように見える。しかしこれを以って、ブランショはかつて政治革命を思考したのと同じやり方で文学を論じている、あるいはメナールのように、政治の次元では挫折した革命の理想を文学において再度やり直そうとしていると断定することは適切だろうか。本稿ではそのような見方に異論を投げかけたい。つまりそれらは表面的な類似にも関わらず、内実においては確固とした隔たりがある。その隔たりは、革命という隠喩を読み解く以下の議論を通して明らかになるだろう。

1章において、書かれたページの中には文学の「問題＝問い」が存在し、ブランショはそれを革命という隠喩によって語るのだと述べた。ではそれは結局のところ、何の隠喩なのか。それは、書かれたページつまり文学においてすでに起こってしまったことの隠喩である。その「起こってしまったこと」は、現在形において明示的にそれとは名指すことのできない出来事である。

さて、シュールレアリスムとカフカを参照してブランショは、文学とは「無」と「すべて」の間で起こる無媒介の運動であると論じていた。そしてそれはそのまま革命の運動へと接続された。

書くという行為そのものによって「私は革命である。自由だけが私をして書かせるのだ」と思うに至らない作家は、実のところ書いてなどいないのである。(PF, p. 311.)

これがブランショの結論だ。焦点になるのは「自由 (liberté)」である。というのも、それは作家の書くという行為を構成する唯一の要素であるからだ。そして「自由」とは革命の産物に他ならない。では革命が産み出す「自由」とは何か。それは2つに分けられる。

まず、革命とはいかなる歴史的瞬間か(14)。ブランショによれば、それは「歴史は今や空虚、実現された空虚であり、歴史は出来事となった絶対的な自由である」(PF, p. 309, 強調原文。)と言いうるような瞬間である。革命の本質を歴史の「断絶」に見る30年代の革命観と通じるところもあるが、ここでブランショが強調するのは、歴史の「空虚 (vide)」でありその「絶対的な自由」である。「この瞬間、自由は、すべてが可能ですべてがなされ得る、という直接的な形で実現されることを要求する。」(PF, p. 309, 強調原文。)つまり革命の「自由」とは、「すべてが可能ですべてがなされ得る (tout est

possible, tout peut se faire)」というものである。というのも、歴史の「空虚」ではあらゆる所与の制約が撤廃されており、自由には際限がないからだ。そしてブランショが語る「革命」の隠喩、あるいは寓話の特異な点は、「自由」が何らかの目的に仕える手段ではなくそれ自体が目的、それも究極的な目的となっている点にある。この革命が抱く確信は次のようになる。「革命的行動が行うことのすべてには絶対的な価値があり、それは何らかの望ましい、優れた目的にかかわる行為ではなく、最終目的であり、「最終的行為＝終幕 (Dernier Acte)」である。」(PF, p. 309.) つまり革命の自由とは、その実現が「最終的行為」となるような自由であり、その実現の妨げになる者は容赦なく抹殺されてしまうほど(「自由か死か」)絶対的な価値がある自由なのだ。では、「最終的行為」がなされた後はどうなるのか。ブランショによれば「恐怖政治 (Terreur)」が出現するという。そこでは何が起こるのか。

それぞれの人間は決まった務めに従事する個人であることをやめ、今ここでのみ行動する。つまり人間は、ほかの場所も明日も知らず、仕事も作品も知らない普遍的な自由である。このような瞬間においては、もはや誰もなすべきことを持たない。というのも、すべてはなされた (tout est fait) のだから。誰ももはや私生活を持たず、すべてが公共的である。

[...]そして結局、人は誰も自らの生への権利を持たず、現実的に他者と分離された、異なる肉体としての自己の存在への権利を持たない。これが恐怖政治の意味だ。言うなれば、市民ひとりひとは死への権利を持っている。(PF, p. 309, 強調引用者。)

「すべてはなされた」、言い換えれば、「最終目的」である革命の絶対的な自由(つまり「すべてが可能ですべてがなされ得る」という自由)は実現された。この瞬間、歴史は終点に到達し動きを止める。「すべてはなされた」というこの非歴史的な空間においては、実現された自由はもはや死と見分けがつかない。それゆえ、「恐怖政治の死」は、「自由な人間たちに作用する自由の働きそのもの」となる (PF, p. 310.)。

2つの自由がある。「すべてが可能ですべてがなされ得る (tout est possible, tout peut se faire)」という自由、そして「すべてはなされた (tout est fait)」 「もはや誰もなすべきことを持たない」という自由。両者は革命という歴史の瞬間において表裏一体の関係にあり、同時に生起する。つまり「すべてが可能である」という自由＝空虚の実現こそ革命であるが、その実現そのものにおいて開かれるのは「すべてはすでになされたため、なすべきことは何もない」という自由＝死の空間である。

さて、当該の一節を再度検討しよう。「書くという行為そのものによって「私は革命である。自由だけが私をして書かせるのだ」と思うに至らない作家は、実のところ書いてなどいないのである。」まず作家は書く行為をしている。そしてその行為を通じて、自分は革命であり、自分が書くことができるのはただ革命の「自由」によってのみなのだと確信するに至る。

冒頭でブランショが立てた枠組みで事態を捉え直そう。つまりページはすでに書かれている。そしてそこには、作家に向けられたある「問題＝問い」が、作品の内部に隠された「作用」をめぐる「問題＝問い」が宿っている。そうであれば上記の作家の確信とはつまり、この「問題＝問い」に対する応答になっているだろう。つまりそれは、書くという行為、無からすべてへと反転するその「作用」を可能にしていたのは「自由」なのだという作家の回顧的な確信である。

では、「自由だけが私をして書かせるのだ」という作家の確信のうちにある「自由」とはいかなるものなのか。それは上述の二つの自由、つまり「すべてが可能ですべてがなされ得る」という革命の自由＝空虚と「すべてはなされた」という恐怖政治の自由＝死が表裏一体になった「自由」であるはずだ。言い換えれば、作家をして書かせる「自由」とは、白紙のページとしての自由＝空虚と、それと同時に（いわばその裏面として）生起する自由＝死である。この限りにおいて、文学は恐怖政治の自由＝死から「言葉の可能性と真理」を得ていると言われるのである（15）。

ただ、ブランショはこれをページがすでに書かれた時点から語っている。作家の「自由」は事後的にしか見出されない。つまり「私は革命である。自由だけが私をして書かせるのだ」とは、書くことによって革命的行為を成し遂げようとする作家の「私は自由であるのだ」という宣言ではなく、書く行為の根源には革命＝恐怖政治の「自由」が存在していた、「私は自由であったのだ」という作家の遡及的な認識である。文学は革命であるが、その革命は、すでに起こってしまったことへの作家の眼差しを通してのみ浮かび上がるのである。

おわりに

以上の議論をまとめよう。端緒において、文学は無であった。これは「すべてが可能である」という革命の空虚に等しい。革命の自由＝空虚が実現するとき、同時に恐怖政治の「すべてはなされた」という自由＝死が現れる。作家の自由はこの死に基づいている。作家が自由に書くことができるのはこの死から言葉を得ているからである。しかし重要なのは、これらは書かれた

ページの「問題＝問い」（端的に言えば、「なぜ書くことができたのか」という「問題＝問い」）を向けられ、それに応答しようとする作家が事後的に垣間見ることしかできないものである、ということである。文学はそれが「問題＝問い」になるときに始まり、文学の存在そのものが「問題＝問い」であると言われることから明らかなように、ブランショは文学を、自分自身において何が起こったのかを問う営みとして提示する。

以上の議論によって、「革命」の隠喩が 30 年代の革命論とは全く異なるものであることもわかるだろう。ブランショはその隠喩によって文学の営みにおいてすでに起こってしまったこと、必然的に先立って起こったことを遡及的に捉えようとしており、それは 30 年代における不可能なもの、いまだ来らざるものとしての革命とは正反対のものなのである（ただし、革命の本質を歴史の絶対的な断絶に見る点に関しては共通しているとも言える）。

革命の隠喩を用いることでブランショは、文学において起こっていることへと肉薄しようとした。そこで見出されたのは、革命の自由＝空虚と恐怖政治の自由＝死である。作家の言葉は死から得られるというこの帰結は、ブランショを言語の問いへと導いた（16）。それはまさに、言語をめぐる以降のブランショの探求の契機だったのである。

注

(1) 郷原 [2011 年、註 27 頁]

(2) 歴史家ジャンヌ・ヴェルデス＝ルルーは 30 年代のブランショを「過激な革命家」と形容している。Verdès-Leroux [1996, p. 80.] また、ブランショは 1931 年頃から 37 年まではほぼ一貫して革命の必要性を主張するが、テロリズム (terrorisme) という語彙が用いられるのは 36 年 7 月、ブルム内閣に対する非難においてのみである。Cf. « Le terrorisme, méthode de salut public », CP, pp. 376-380.

(3) Mesnard [1996, p. 109.]

(4) Bident [1998, p. 253./215 頁]

(5) *Ibid.*

(6) RA, pp. 402-405.

(7) 「精神の動物界」が発表された時にはその続編は予告されておらず、それは完結したひとつのテクストとして提示されていた。以下は推測の域を出ないが、「精神の動物界」を書いたブランショが、それに導かれるようにして続編の必要性を感じた可能性も十分に考えられるだろう。

(8) « Qu'est-ce que la littérature? » という表現が読まれることから明

らかなように (PF, p. 294.)、*« question »* という語の選択にあたっては明らかにサルトルの影響が認められるが、そのコンテクストについてはここでは措く。また、ヘーゲル＝コジェーヴというもうひとつの重要な参照項についてもここでは割愛せざるを得ない。

(9) Cf. *« Réflexions sur le surréalisme »*, PF, pp. 90-102.

(10) Yasuhara [2006, p. 75.]

(11) Hill [1997, p. 31.]

(12) 明らかにブランショの思い描く革命は「理念上の虚構」として存在している。Cf. 安原 [2001, 19 頁]

(13) Jenny [2008, p. 129.]

(14) 予め断っておけば、ここでブランショの語る「革命」は現実的な出来事ではない。たしかにフランス革命における「恐怖政治 (Terreur)」が参照されるが、そこにはブランショの解釈が多分に加わっており、「革命 (恐怖政治)」は一種の寓話となっている。また、ここでの「革命 (恐怖政治)」の解釈 (特に「死への権利」をめぐる解釈) は、50 年代以降の彼の「不服従 (insoumission)」の思想に受け継がれていくとする見方もある。Cf. Balibar [2011]

(15) この言葉と死の共犯関係こそブランショが論文後半部において徹底的に論じる点であるが、本稿で扱うことはできない。

(16) 「文学と死への権利」での前半部分 (革命の隠喩) と後半部分 (文学言語の探求) のつながりに関しては、門間 [2006] が詳細な検討を行っている。

参考文献表

※訳出にあたっては、既訳がある場合には参考にさせていただいたが、すべて拙訳である。

ブランショの著作

RA : *« Le règne animal de l'esprit »*, *Critique*, n°18, novembre 1947, pp. 387-405.

PF : *La Part du feu*, Gallimard, 1949. 『完訳 焔の文学』重信常喜・橋本守人訳、紀伊國屋書店、1997 年。

CP : *Chroniques politiques des années trente 1931-1940*, David Uhrig (éd), Gallimard, «NRF», 2017.

二次文献

BALIBAR, Étienne, « Blanchot l'insoumis. (à propos de l'écriture du *Manifeste des 121*) », *Citoyen Sujet et autres essais d'anthropologie philosophique*, PUF, 2011.

BIDENT Christophe, *Maurice Blanchot-partenaire invisible*, Champ Vallon, 1998. (『モーリス・ブランショ 不可視のパートナー』上田和彦他訳、水声社、2014年)

DERRIDA Jacques, *Parages*, Galliée, 2003. (『境域』若森栄樹訳、書肆心水、2010年。)

HILL Leslie, *Blanchot extreme contemporary*, Routledge, 1997.

HOLLAND Mike et ROUSSEAU Patrick, « Topographie-parcours d'une (contre) révolution », in *Gamma*, n°5, 1976.

JENNY Laurent, « La révolution selon Blanchot », in *Je suis la révolution*, Belin, 2008.

LOUBET DEL BAYLE Jean-Louis, *Les non-conformistes des années 30*, Seuil, 1969.

MEHLMAN Jeffrey, *Legacies of anti-semitism in France*, Minnesota U.P., 1983. (『巨匠たちの聖痕 フランスにおける反ユダヤ主義の遺産』内田樹他訳、国文社、1987年。)

MESNARD Philippe, *Maurice Blanchot. Le sujet de l'engagement*, L'Harmattan, 1996.

NANCY Jean-Luc, *Maurice Blanchot : passion politique*, Galilée, 2011. (ジャン＝リュック・ナンシー『モーリス・ブランショ 政治的パッション』安原伸一朗訳、水声社、2020年。)

SURYA Michel, *L'autre Blanchot L'écriture de jour, l'écriture de nuit*, Gallimard, coll. «tel», 2015.

UHRIG David, «Blanchot, du « non-conformisme» au maréchalisme », *Lignes*, n°43, 2014.

UNGER Steven, *Scandal & Aftereffect: Blanchot and France since 1930*, University of Minnesota Press, 1995.

VERDÈS-LUROUX Jeannine, *Refus et violences: politique et littéraire à l'extrême droite des années trente aux retombées de la Libération*, Gallimard, 1996.

YASUHARA Shinichiro, *Maurice Blanchot dans les années 30-la dissidence politiques et la perfection littéraire*, thèse de doctorat, juillet

2006, universit  de Paris 8.

上田和彦「「1930年の精神」とブランショ（一）」『外国語・外国文化研究』15号、2010年7月、関西学院大学法学部外国語研究室。

同「「1930年の精神」とブランショ（二）」『言語と文化』15号、2012年3月、関西学院大学言語教育研究センター。

同「バリバールとともにブランショの不服従を考える―侵犯と抵抗の方法としての非応答の権利」市田良彦＋王寺賢太編『〈ポスト68年〉と私たち「現代思想と政治の現在」』平凡社、2017年。

郷原佳以『文学のミニマルイメージ モーリス・ブランショ論』左右社、2011年。

西谷修『離脱と移動―バタイユ・ブランショ・デュラス』、せりか書房、1997年。

西山雄二『異議申し立てとしての文学 モーリス・ブランショにおける孤独、友愛、共同性』、御茶の水書房、2007年。

門間広明「不死の運命、死の権利―モーリス・ブランショ「文学と死への権利」再読」『フランス文学語学研究』25号、2006年2月、早稲田大学大学院「フランス文学語学研究」刊行会。

安原伸一郎「1930年代から1940年代におけるモーリス・ブランショの「拒否」の意志」『言語情報科学研究』3号、東京大学言語情報科学研究会、1999年。

同「どこにもない革命―1930年代におけるモーリス・ブランショの政治時評について」『言語態』2号、2001年、言語態研究会。

同「「死」で文学を語ること―「文学と死への権利」の可能性」『思想』999号、岩波書店、2007年7月。